



## あの頃の学校新聞

二〇一〇(平成二十二年)六月十五日、町内在住の新川善一郎氏より、西原中学校新聞部発行の『若竹新聞』(九枚)を寄贈していただきました。新聞は、一九五三(昭和二十八)年六月から一九五四(昭和二十九)年四月までのもので、当時の社会背景や生徒たちの心情が分かる貴重な資料となっております。

当時の西原中学校は、現在の西原小学校敷地内にあり、小学校と中学校が併置されていました。終戦後ということもあり、コンクリート造りの校舎がなく、雨降りの

際は、教室  
内でも傘を  
かさ  
差さなけれ  
ばならない  
状況でした。

そのような  
なかで、新  
聞部の生徒  
たちは、月



1953年(昭和28)当時の西原小中学校

に一度『若竹新聞』を発行していました。

一九五三年(昭和二十八)十月四日の新聞(一周年記念特別号)にひとときわ目を引く詩がありますので紹介します。

何故かは知らないが  
小那覇村はこいしい  
昔栄えたこの村も  
今は単なる片田舎  
昔のぼったあの木々も  
前に遊んだあの道も  
今はその姿を消して  
ただ雑草のみしげる  
数少ない家々は  
淡き夕日を受けて  
さびしき影を長びかす  
今一度住んでみたいけれど  
いつ追われるか知らぬ故  
帰るに帰れぬわが村は  
ただ遠くより眺めるだけ

この詩は当時、中学校三年生だった玉那覇隆敏氏の作品です。小那覇地域が米軍管理下にあって、立ち入ることができない状況、その寂しさを叙情的にうたっています。

この詩から、終戦後の西原の状況が分かるとともに、土地を奪われた人々の心情が伝わってきます。